

書評：ヴィクトル・ザスラフスキー 『カチンの森 ポーランド指導階級の抹殺』

(根岸隆夫訳、東京：みすず書房、2010年、177pp.)

Book Review, Victor Zaslavsky, *Pulizia di classe : Il massacro di Katyn*
(Class cleansing : the Katyn Massacre). Tokyo : Misuzu Shobo, 2010, 177pp.

岡 野 詩 子

Utako OKANO

はじめに

本書は2006年ポーニャで出版された *Pulizia di classe: Il massacro di Katyn*¹の邦訳である。著者ヴィクトル・ザスラフスキーはレニングラード生まれのロシア人であるが、1975年にカナダに移住し、その後アメリカやイタリアで教鞭を取り、亡くなる2009年までローマのルイス・グイド・カルリ社会科学自由大学の教授であり、専門は第二次世界大戦後のソ連（ロシア）・イタリア政治関係史であった。

カチンの森事件に関する文献は、戦後から欧米諸国で多数出版されているが、邦訳書では、W・アンデルス著の『裏切られた軍隊』²、1963年のヤヌシュ・K・ザヴォドニー著の『カティンの森の夜と霧』³、そして1991年の渡辺克義氏による『カチンの森とワルシャワ蜂起 ポーランド歴史の見直し』⁴の3冊が、日本国内で出会えるカチンの森事件に関する文献である。本書はイタリア語版（原書）、ドイツ語版、英語版が出されているが、ポーランド語版は出版されていない。したがって、本書は約20年ぶりに日本国内で出版されたものであり、カチンの森事件はこの20年の間でソ連崩壊による機密文書の公開などにより目まぐるしい経過を辿っている。本書は西側の資料だけではなくソ連の機密文書からも事件を遡り検証しているのが特徴であり、さらに訳者による事件の概要そしてごく最近の動向も補足内容として組み込まれていることから、カチンの森事件の学術研究書としては大変意義深いと考える。

1. 本書の構成

本書の構成は次の通りである。

序論

I. ポーランド分割とポーランド市民のソ連収容所拘禁

1 Zaslavsky Victor, *Pulizia di classe: Il massacro di Katyn*, Bologna: Società editrice Il Mulino, 2006.

2 ザヴォドニー、ヤヌシュ.K., 『カティンの森の夜と霧』、読売新聞社、東京、1963年。

3 アンデルス、ウラディスラウ、『裏切られた軍隊：ポーランド第二軍団の悲劇』、光文社、東京、1952年。

4 渡辺克義、『カチンの森とワルシャワ蜂起 ポーランド歴史の見直し』、岩波書店、東京、1991年。

II. 殺戮と追放

III. 階級殺戮、すなわち階級浄化

IV. カチンの虐殺 責任者たちを探して

V. ソ連のつく嘘と西側によるその隠蔽

VI. ソ連の公式見解に甘んじる政治家と歴史研究者

VII. ゴルバチョフの沈黙

VIII. カチン事件 歴史学と政治へのひとつの教訓

訳者あとがき

原注、地図、カチン事件年表、人名索引

2. 本書の内容

まず、「I. ポーランド分割とポーランド市民のソ連収容所拘禁」で、著者はカチンの森事件が起きた前提として、ヒトラーとスターリンの接近、つまり1939年8月23日に交わされたモロトフ＝リッベントロップ協定、いわゆる独ソ不可侵条約を理解する必要があると述べている。この協定には、ヨーロッパを独ソで二分割する秘密議定書が含まれ、その中にはポーランドの分割が規定されていた。そして9月1日にドイツのポーランド侵攻により第二次世界大戦の勃発、17日には東からソ連軍がポーランドに侵入した。独ソの分割によって、ソ連はポーランドの領土の52%、国民の3分の1を獲得し、その中には約25万人の軍の将兵が戦争捕虜として含まれていた。その後、ソ連側の捕虜の振分けにより、将軍、大佐、中佐、その他のポーランド上級国家公務員、軍関係公務員はスタロビエルスク収容所、情報機関員、防諜機関員、憲兵、警察官、看守はオスタシュコフ収容所、ドイツに分割されたポーランド領土出身の戦争捕虜はコジェルスク収容所に移送された。著者によると、モスクワの複数の公文書館には、収容所内のポーランド人将校とその他の捕虜の1939年10月から1940年3月までの生活についての資料が保管されているという。

「II. 殺戮と追放」では、1940年3月5日付のポーランド人将校の運命を決定付けるベリヤ書簡について記されている。この書簡では、スターリン、モロトフ、ベリヤ、カガノーヴィチ、ヴォロシロフ、カリーニン、ミコヤンがNKVDに対し、ポーランド人戦争捕虜を裁判なしに処理するよう、つまり「最高刑、銃殺」を命じている。ポーランド人将校処刑決議の背景として、ソ連は自国の安全を考慮し、ソ連指導者はポーランドの独立におけるポーランド人指導者を徹底的に排除するというものだった。さらに、同時に、その家族のシベリアやカザフスタンへの追放、財産没収もともなっていた。

「III. 階級殺戮、すなわち階級浄化」で、著者はスターリンの主義を分析するために「階級浄化」という表現を強調している。ここでは、スターリンの全体主義に触れられており、カチンの森事件の動機、原因を理解するため、全体主義国家の本質と理論への理解の必要性を示している。さらに著者

によると、全体主義の中で、経済、情報源、強制手段の完全な支配と達成しようとするために、人間ひとりひとりの存在だけではなく、日常生活の内容そのものを支配そして抑圧をしてきた。この全体主義は、スターリン主義の中で体现化された。その体制に基づき、捕虜となった愛国心の強いポーランド人将校つまりポーランド指導層を共産主義者にすることは不可能であると判断し、抹殺という決断が下されたのだった。

「Ⅳ. カチンの虐殺 責任者たちを探して」では、Ⅱ章でも取り上げられているが、ポーランド人将校の運命を決定付けるソ連政治局の極秘文書を分析している。これは、1990年代になって初めて公開された。それまでソ連はドイツの犯行と決めつけていたのは言うまでもない。1943年4月の事件発覚で、ドイツ側は同盟国及びドイツ占領下にある大半の国の代表から構成される国際医学調査委員会を設立し発掘調査にあたった。そこで、1940年春頃に殺害と結論を出し、ソ連の犯行であると主張した。しかしながら、カチン一帯がソ連に解放されるとすぐに、ソ連政府は独自の調査委員会を作り、ドイツに犯行を擦り付けることに専念したのだった。

「Ⅴ. ソ連のつく嘘と西側によるその隠蔽」の最初の文章は、「西側政府の積極的な帮助がなかったならば、ソヴィエト指導部は半世紀ものあいだカチン虐殺の自己責任を隠しとおすことはできなかったらう。」(p.73)とある。西側諸国は早くから事件の真相を得ていたのにもかかわらず、アメリカ政府は1950年代初めまで、イギリス政府はソ連政権の崩壊まで、事実を公に発表し解決へ向けて動き出そうとはしなかったのだ。それにもかかわらず、ソ連の犯行だと主張する者もいたが、英米各政府の上層部によってもみ消されていたのは事実である。著者は英米の協力関係について、「ヒトラーを打倒するためには、スターリンとの同盟を維持する必要があった。」(p.75)と述べている。チャーチルはスターリンの協力を得るためにはカチンの森事件を先送りにすることを決め、ルーズヴェルトのカチンの森事件に対する態度は東欧への無関心と、戦後世界秩序を建設するにあたってスターリンの協力を得ようとする願望があったという。一方、ソ連圏では1943年にカチンの森事件の司法解剖に参加した国際医学調査委員会に加わっていた者は逮捕、監視などの抑圧を共産党から受けていた。ソ連は、カチンの森事件に関わる者を徹底的に排除し事実を隠蔽することに執着していた。

ソ連は、カチンの森事件はドイツの犯行だという公式見解を譲らず、少しでも事実近づきつつある者に対しては圧力をかけた。著者は、「Ⅵ. ソ連の公式見解に甘んじる政治家と歴史研究者」で、KGBが作成した1976年3月付で在外ソ連大使館と対外情報・宣伝機関用の文書⁵が、ソ連の公式見解において最も権威があるとし、その文書を本文に引用している。まず、カチンの森事件の虐殺の提示から始まり、ニュルンベルグ裁判でドイツの有罪が認められたという確認、1951年にアメリカ議会がカチン問題特別委員会を設置しソ連政府に証拠を求めたことに対する抗議、さらにカチン問題をめぐ

5 Katyni. Dokumenty Ludobójstwa Dokumenty i materiały archiwalne przekazane Polsce 14 października 1992 r., Instytut Studiów Politycznych Polskiej Akademii Nauk, Warszawa 1992, pp.77-81.

る反ソ的な行為への抗議などが記されている。ソ連政府は外国人、自国民を問わずカチン一帯を立ち入り禁止区域にし、国際組織が調査を申し出てもそれを拒否し、自国に責任がふりかからないように全力を注いだ。その最中、1962年にはカチンの森事件の詳細が記された最初の学術文献⁶がJ. K. ザヴォドニーによって書かれ、それにはソ連の犯行だと結論付けている。これに続き、多数の文献、証言、回顧録が出た。これらは、実際に現場に行けず厳密な調査や科学的分析もしていない中で、1951年のアメリカ議会委員会とザヴォドニーの出した結論を確認するものであったと、著者は述べている。一方、ソ連共産党に近い歴史学者はソ連の責任を否定し続け、欧州諸国での共産党に近い歴史学は中立的立場を取り自らの地位を守っていた。

「Ⅶ. ゴルバチョフの沈黙」では、ゴルバチョフ登場後の変化が紹介されている。ゴルバチョフが1985年に書記長に就任したことによって、ソ連制度の改革が行われ始めたのは明らかである。そのうち、グラスノスチ（情報公開）は社会主義圏の歴史研究の方向性も変え、独ソ不可侵条約の秘密議定書やカチンの森事件が政治的な問題として再び浮上した。ゴルバチョフはこれらの原文の文書の存在を知っていたにもかかわらず沈黙を通すことにした。しかし、この時期にそれらの文書を破棄することは不可能であり、ポーランドの指導部や世論に対して過去の推移の説明を避けられることはできない状況であった。そこから、1990年に文書の存在を公表するまでのソ連政府幹部による文書の検証、公表に至った経緯が、この章で詳細に書かれている。

「Ⅷ. カチン事件 歴史学と政治へのひとつの教訓」では、西側諸国がカチンの森事件の真相を公にしなかった理由は何か、そしてゴルバチョフが事件を決定付ける証拠資料の公開を頑なに拒んだのはなぜだったかを、著者は再度この章で問いかけている。前者に対して、著者は、西側諸国は様々な時代の局面の歴史的瞬間における様々な動機によるものと述べている。これらの処置のおかげで、1990年まで真相の断定を遅らせることができたことを示す文書がソ連内部資料の中にある。一方、ゴルバチョフが認めるのを拒んだ理由とは、著者によると、ソ連最後の指導者の個性、最終局面でのソ連制度の性格つまりこの制度の変革不可能性の根底にある理由に焦点を当てたものだ。すなわち、一旦カチンの森事件の犯行を認めてしまうと、ソ連の困難な歴史を一から見直す必要が生じ、それによってこれまで辿ってきたソ連史全てに影響が及ぶことを恐れたのではないだろうか。最後に著者はカチンの森事件を「人類と人権に対する犯罪」(p.141)と定義し、そしてロシア民主主義の発展にふれ、それは「過去との対決能力で決まる。スターリン主義の断罪とその犯罪の国民的責任の認識は、ロシアの新しい世代に国民的責任感が浸透されなければ難しい」(p.143)と締めくくっている。

「訳者あとがき」では、著者ザスラフスキーについて、およびカチンの森事件の概要などが記されており、本書の補足としては充実した内容で書き添えられている。

6 Zawodny, Janusz K. (ザヴォドニー、ヤヌシュ・K) [1962]. *Death in the Forest: The Story of the Katyn Forest Massacre* (『カチンの森の夜と霧：第二次世界大戦をめぐる大量虐殺事件の真相記録』), Indiana: Notre Dame University Press.

3. 本書の特徴と評価

本書の特徴として見られる点は、ロシア人から見たカチンの森事件ということである。数多くある文献は、ほとんどポーランドもしくは西側諸国で出版されたものばかりだ。著者自身、西側に移り住んだロシア人ではあるが、ロシア人としての見解を示した本書は非常に興味深い。

カチンの森事件に関する主要な学術文献うちの一つとして、前述の通りヤヌシュ・K・ザヴォドニーの文献⁷が挙げられる。ロシア人研究者が初めてカチンの森事件をテーマに調査できるようになったのはソ連崩壊後であり、当然それまでは誰もソ連側の資料を扱っての研究をすることはできなかった。その最中、1962年にザヴォドニーの文献が出版された。彼は1943年4月のドイツが設立した国際医学調査員会の現地調査の資料、調査に同席した人々の証言などから、ソ連の資料に接せず犯行現場にも行けず遺体の科学的分析もしていなかったが、犯行の責任はソ連にあると結論付けた。この文献は西側で得られるあらゆる資料からソ連の犯行だという見解を裏付けており、事件を知る上ではまず欠かせないものだ。一方、2006年出版の本書は、ロシア人の視点からであること、ソ連崩壊後に公開された資料に基づいていることが特徴である。ちなみに、著者は1998年「カチンの虐殺一罪と嘘」⁸を出版しており、1991年のゴルバチョフ政権下で明らかになったカチンの森事件の関連文書で最も重要なものを掲載、解説している。両文献の著者ザスラフスキーとザヴォドニーの事件の実証部分はほぼ一致している。つまり、資料公開に伴いロシアでも様々なカチンの森事件の文献が出されており本書だけに限らないが、1962年のザヴォドニーの見解が正確であったことが確認されたとも言える。

西側諸国つまり主にイギリスおよびアメリカと著者との事実認識および解釈の違いについて、著者も事件はソ連の犯行と断定しこれに関しては西側との見解に相違点はない。しかし、評者が注目したのは本文中で何度か強調される、「西側政府の積極的な幫助がなければソ連は事件の自己責任を隠し通すことはできなかった。」(p.73)というところだ。つまり、ソ連の隠蔽政策に西側は加担したおかげで、1990年まで事件が表舞台に出ることはなかったのだ。これまで、カチンの森事件はソ連の犯行という前提で進められてきており、西側諸国のソ連への協力にそれほど光は当たっていなかった。事件の責任はソ連だけではなく西側諸国にもあり、それが戦後の東西対立の中で複雑化していった。言い換えれば、将校虐殺の悲劇からその後の処理でポーランドを苦しめたのはソ連そして西側であり、両各国には連帯責任があることを表しているのではないだろうか。西側は事実が分かっているにもかかわらず目をつぶり、そしてソ連崩壊後はソ連の犯行だと断定する立場に変わった。多からず責任逃れのような立場をとっているかのようであり、西側が敢えて自己責任を追及することはしていない。ここが著者と西側諸国との解釈の違いだと考えられる。

7 Zawodny, Janusz.K., *Death in the Forest: The story of the Katyn Forest Massacre*, University of Notre Dame Press, 1962.

8 Zaslavsky Victor, *Il Massacro di Katyn: Il Crimine e la Menzogna*, Roma: Ideazione Editrice, 1998.

次に、事件の解釈の仕方である。ソ連史における1930年代のスターリン政権による大粛清については周知の事実である。これによりソ連国民100万人以上が銃殺されたと言われている。それに比べるとカチンの森事件で殺害された約22000人のポーランド人将校については、スターリン主義犯罪のうちの一つであり、犠牲者の人数的にもソ連国民の犠牲者の方が断然多く、カチンの森事件は特に例外をなすとはいえないと著者は記している。それでは、なぜカチンの森事件が国際関係史の中で重要な位置を示しているのか。事件の発端は1939年8月23日に締結された独ソ不可侵条約におけるポーランドの2分割が取り決められた秘密議定書からである。つまり、ドイツ・ヒトラー、そしてソ連・スターリンの2つの全体主義国が手を組んだことから事件は始まっていたのだ。その後1941年6月22日の独ソ戦勃発により、連合国はドイツ・ヒトラーを打倒するためにソ連・スターリンと組む必要があり、それを達成させるにはソ連の犯罪つまりカチンの森事件に目をつぶらざるを得なかったのである。戦争犯罪を裁くニュルンベルグ裁判においても、裁判自体がヒトラーを全否定したものであり、もし連合国の主要な一員であったソ連の犯行と決めつけると、ヒトラーを一部肯定することではないにしても、ナチスを裁く法廷で連合国の戦争責任が問われかねないことになってしまう。そのため、イギリス、アメリカはカチンの森事件を裁判にかけることに対して乗り気ではなかったのである。そして、冷戦時代、様々な文献が西側諸国で出版され、当時の関係者の証言等によりソ連の犯行だと分かりきっていた。もしそこで西側政府が事件の真相解明に乗り出したとすると、連合国としてソ連と手を組んだこと、ニュルンベルグ裁判で敢えて事件には触れないようにしたことが明らかになる。当然西側諸国に対しても責任がふりかかってくることに恐れを感じ、事件を全面的に取り上げないようにしたのではないだろうか。このように、著者はソ連と連合国の協力を「不自然な連合」(p.10)と表現している。そのため、カチンの森事件は全体主義両国ドイツとソ連の1939年から1941年にかけての協力関係、それ以降の全体主義国ソ連と連合国との協力関係の中で踊らされたことで非常に複雑な経過を辿っている。したがって、カチンの森事件は、ドイツとソ連の協力関係、ソ連の全体主義、そしてソ連と西側諸国の協力という、あらゆる方面から彼らの都合により複雑化し、ただソ連の犯行で済まされるべきではなく他にも責任問題が生じているというのだ。

本書は、ソ連の機密文書による事件の実証、そしてさほど明るみに出なかった西側諸国の事件への加担を大きく取り上げていることで、これまでの研究書とは異なりカチンの森事件の言わば裏の側面を書き記している点では非常に興味深い。そしてもう一つ重要な論点として、カチンの森事件を研究する上でソ連全体主義の本質を検証する必要があるという新たな課題が浮かび上がった。その本質がカチンの森事件の発端となり、戦後も尾を引き、現在に至っている。本書はそうした点において、全体主義に翻弄された国家、人々そしてすでに公開されている機密文書などを本文に出すことで、カチンの森事件を読み解く鍵を与えているようだ。本書はカチンの森事件の事実関係を詳細に整理しているだけではなく、全体主義と事件の関わりも丹念に説明していることから、価値の高い書と言えるだろう。